

生涯を町の発展に ささげた須藤時俊

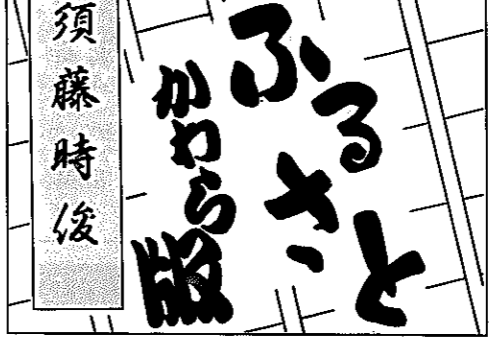
須藤小路にその名を残す須藤時俊。彼の功績をたたえた石碑「須藤翁碑」が西永寺境内にあります。その碑文から彼の功績や生涯を追ってみましょう。

須藤時俊は天保十一年（一八四〇）二月一日、蒲原郡外城村（新発田市）に生まれました。明治二年に父与一郎が白根町の名主となったため、時俊は父とともに白根町（能登）に移り住んだのです。

時俊は明治十二年から中蒲原郡書記を勤め、以後白根町外四カ村戸長、戸長総代、県会議員、白根町長などの要職を歴任。県会での時俊は、当時の新潟新聞が「もう十年も若かったら、自由党を操縦させて、一飛躍を試みさせてみたい」と評するほどの実力者でした。時俊は、当時洪水に苦しめられていた信濃川下流の農民を水害から救うために、特に信濃川治水問題に熱心に取り組んだのです。

西永寺にある石碑には時俊の主な功績が四点記されています。その一つが明治十年十月の富月橋の架橋です。それまで白根町と西蒲原との往来は、渡し船が唯一の交通手段でした。当時、橋を架けることは小さな川なら

ともかく、中ノ口川や信濃川のような大きな川になると、巨額な資金が必要であることや、架橋技術から、非常に困難なことでした。長さ四十間余りの木橋は、有料ではありましたが、白根町と対岸を結ぶ最初の橋として、計り知れない恩恵を与えたのです。



⑬ 須藤時俊

った下水堀の付近一帯は、はじめした湿地帯でも馬も通ることさえできませんでした。そこで時俊は明治十九年八月、そこを埋め立てて乾燥地に変えたのです。面積は十数町歩に及びました。その結果、新たな町並みができ、役所、学校、劇場、旅館、屋敷などが立ち並び、元の姿を一変させたのです。三つ目は国道の白根町縦貫で



西永寺境内の須藤翁碑

す。それまで白根町は水上交通は発展していたものの、陸上交通の整備は遅れていました。そこで時俊は長年官庁に要請を続けました。明治四十三年八月、国道が白根町の市街地を通ることになり、商業の賑わいは大きく広がりました。

そして四つ目が排水機の導入です。洪水が起るたびに莫大な被害を被る農民を憂い、時俊は排水機を数カ所に設置することを計画。意見の取りまとめに奔走しました。排水機は大正二年に完成。しかし時俊はそれを待たずに、明治四十五年四月十九日、七十二歳で亡くなりました。時俊は私財をなげうち、郷土の発展のためにその生涯をささげました。石碑には「人を見ること己のごとく、郷を見ること家のごとく」と刻まれ、その人柄と功績をたたえています。

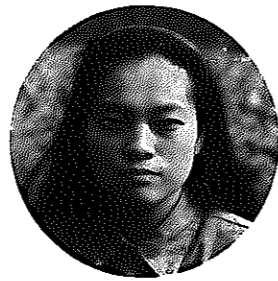
白根市史七巻、好評発売中。申し込み、問い合わせは教育委員会社会教育課（☎373・3171）へ。

土手の桜とじいちゃん

語る人

青木千鶴子さん

（下鷲ノ木一二十六歳）



夏は土手へ花火を見に。秋は土手へスキを見に。冬は土手へ雪を見に。そして春「ねえ、じいちゃん、また桜が咲いたよ。おっきいのがふたつ、ちいせのがひとつ」。腰の曲がったじいちゃんの大きな手に引かれて土

私の思い出

あの時（一）の場所

手の小さな道を上って行く。「わあ、うちの桜が咲いたよ、たくさん咲いたよ、きれいだねえ。だって、家から真つすぐ見えるんだもん、うちの桜だよ。来年もきれいに咲く？」じいちゃんのかついで顔が笑っていた。桜は毎年、美しい花を見せてくれた。あんなに高いと思っていた土手も、いつの間にか低くなった。そして、じいちゃんもいなくなった。

三本……二本……一本……土手の桜は今はない。見通しがよく分った分、幼いころからの大切な友達がどこかへ行ってしまったような寂しさが心に残っている。「ねえ、じいちゃん。来年はもう、桜は咲かないんだよ」

下鷲ノ木 信濃川堤防

写真上：青木さん（中央）が四歳のころ。右手奥には桜の木が三本見える写真下：同じ場所での現在の状況。桜の木はない

生涯、時代学、習生

教育委員会社会教育課 佐藤 正 則

生涯学習 推進協議会とは

白根市生涯学習推進協議会は本市の生涯学習推進の母体となる組織です。この協議会は学識経験者や保育園、学校、各種団体、地域、行政などの代表者で構成されています。ここには学習プログラム開発部会、有志指導者派遣制度部会、地域づくり部会の三つの部会があり、それぞれのテーマについて検討しています。今回は学習プログラム開発部会について紹介しましょう。

たかがはし、されどはし

学習プログラム開発部会では、人が誕生してから高齢者になるまでを六つの年齢層に分け、それぞれの学習課題を検討しています。例えば幼児期のしつけの中で問題になる、はしの持ち方。このことについては、持ち方はどうでも



よく、食べられれば良いという人と、正しい持ち方を覚えることは大切だという人がいると思います。今の子供たちの好きな料理を考えてみると、フォークとスプーンだけでも十分に食べられそうです。しかし、もし食卓からはしが消えるときが来るとしたらどうでしょう。そうならば、それははしの持ち方だけの問題にとどまらず、食生活や日本文化の伝承という問題にまで発展しそうです。

このように部会では、毎日何気なく行っていることであっても、もう一度その意義を問い直してみることが必要であると考えています。これからの人間が、心豊かに生きがいある人生を送るためには、文化の伝承も大事な要素です。

健全な市民として成長するためには必要なこと何でしょうか。また、ある年齢層で最低限身に付けてたいことはどんなことでしょうか。部会では市民憲章をよりどころとして、そのような問題を、個人や家庭だけではなく、地域や学校、行政などが一体となって取り組んでいくことを考えています。

私の一冊

No.8

四季抄「風の旅」
星野富弘著
立風書房

竹内久子さん
（中町・59歳）



感動を受け、今でも時々手にしています。私が昨年、大病をして絶望的になったとき、生きる希望と勇気をこの本で教えられ、苦しみを乗り越えることができました。この本は、私にとってかけがえのない宝物です。



市立図書館新刊案内

市立図書館 ☎ 373-2810
30歳で生まれ変わる本（安井かずみ） バンコク好奇心（前川健一） 旅の絵日記（平野レミ） アクアリウム之夜（稲生平太郎） 絹の飾り糸（金丸とく子） シルクロードをゆく（駒田信二） 花ものがたり（高橋治） 家族の肖像（内海隆一郎） 幻にて候（黒部亨） 別離の条件（笹倉明） 溢れる春（島津佑子） 村の名前（辻原登） 貧者の核爆弾（中村正軌） 火の用心（倉本聡） ほかに多数

▶私の思い出 あなたの心に残るあの時の思い出をお寄せください ▶私の一冊 あなたの愛読書をご紹介ください ▶あて先 白根市役所広報広聴係（〒950-12 白根市大字白根1235・☎373-2111(内)333） 皆様のお便りをお待ちしています

原稿募集